

# 掲示板

ランド広島・社長)

○平成十年度特設「インドシナ地域総合開発計画管理セミナー」研修

## 研究会・研修会等への

### 報告者・講師の派遣

(平成十年八月～十月)

#### ○「当別町農業者研修会」

主催 JA当別町篠津中央土地改良区

とき 平成10年8月27日

テーマ ①「農地問題の現状と担い手対策」

②「農用地の有効利用と担い手育成」

講演者 ①谷本 一志(北海道東海大学・教授)

②松島 亨(財団法人広島県農業開発公社・

(有)農業公社ファーム

主催 国際協力事業団(JIC)

A)、支援(北海道開発局・はまなす財団)

とき 平成10年9月7日

テーマ 「北海道の泥炭地開発」

講演者 北倉 公彦(当研究所・特別参与)

○平成十年度特設東欧「農産物市場経済コース」研修

主催 国際協力事業団(JIC)

A)、支援(帯広市他)

とき 平成10年10月14・15日

テーマ ①「野菜の生産と市場動向」

②「北海道農業における営農支援システム」

講演者 富田 義昭(当研究所・

常務理事)

○平成十年度特設東欧「農産物市場経済コース」研修

主催 国際協力事業団(JIC)

A)、支援(帯広市他)

とき 平成10年10月16・19日

テーマ ①「国による農村地域の社会資本整備」

②「研修コースのデスクラッシュ」

講演者 北倉 公彦(当研究所・

特別参与)

### 農政情報

#### 新農業基本法について答申

「食糧・農業・農村基本問題調査会」(首相の諮問機関)は、九月十七日「国民のための農政」への転換を提言する答申をまとめ小淵恵三首相に提出した。

同調査会は二十一世紀農政の指針となる新農業基本法を検討してきたもので、昨年十二月十九日には「答申中間とりまとめ」を発表していたが、今回最終答申を行ったものである。現行の農業基本法は昭和三十六年(一九六一年)制

定で、今年で三十七年目になる。

この間に国内的には高度経済成長、又昨今はバブル崩壊等による経済社会の変化、国際的にはWT O(世界貿易機関)体制の発足、ガット・ウルグアイラウンドの受託等わが国農業を取り巻く情勢は激変した。このため農地の減少、農家の高齢化、担い手不足など「国内農業の弱体化」に歯止めをかけるため、「国民の視点」に立った食糧・農業・農村政策の再構築を求めたものである。

この外、答申のポイントとして①国内生産を基本に総合的な食糧安全保障を確立②食糧自給率目標を生産・消費の指針として設定③農業・農村の多面的機能を十分に発揮④中山間地域へ直接所得補償を導入⑤意欲ある担い手の確保、育成に施策を集中化⑥農業生産法人の形態に株式会社を追加⑦農産物価格政策に市場原理を一層活用⑧担い手の経営安定に所得確保対策を導入⑨自然循環型の持続的な農法への転換⑩三～五年の政策プログラム化、五年ごとの見直し等である。

## DATA FILE

### 関連事項／DATA

#### ホクレン農業協同組合連合会

〒060-0004  
札幌市中央区北4条西1丁目  
☎ 011(232)6108 広報宣伝課

#### 北海道農業開発公社

〒060-0005  
札幌市中央区北5条西6丁目  
☎ 011(271)2231  
農地開発センター内

#### 財団法人賀陽町農業公社

〒716-1100  
岡山県上房郡賀陽町大字豊野1-2  
☎ 0866(54)0900

#### 北海道拓殖短期大学

〒074-0015  
深川市メム4558  
☎ 0462(3)4111

## 編集後記

「ハイポニカトマト」から考える

一九八五年の筑波万博でトマトの巨木が展示され注目を集めたことを記憶されている方もいらっしゃる事でしょう。一本のトマトの木(まさに直径一〇センチにもなる)トマトの茎はまさにトマトの木と言つにふさわしいから幾千ものトマトがたわわに稔っている場面をテレビ等でも盛んに放映していた。

この「ハイポニカ」トマトの技術を確立した野沢重雄博士のイン

タビュー記事で博士は「このトマトの木を見る度に思うのですが、そもそも人間が、他の生命体自分分の都合のいいようにコントロール出来ると思うのは間違っている。トマトがこれだけの巨木に生長すると言う事実は、我々人間の知識をはるかに越えた高度なメカニズムの存在が証明されたと言つことで、こんなすごい能力を持つ生命体を、人間が支配したりコントロールするなんてできっこない」とおっしゃっている。このような驚異的な技術を確立した博士の言葉だけに説得力がある。

「ハイポニカ」トマトは良く最

近流行の遺伝子工学を駆使したハイオテクノロジーの技術の一端と間違えられるが、博士によると「トマトの種を植えたときから、植物にとって最適な条件が与えられ続けること、(肥料でも、温度、湿度でもいくら成長してもその分あげるよ)と言つことが植物が確認できた時点からその植物の成長スピードは飛躍的に上がる」。

トマトは一例に過ぎないが、植物にこのような潜在能力が遺伝的に組み込まれていることは何を意味するのだろうか。ある科学雑誌で人間の頭脳について書かれていたが、人間は他の動物とは圧倒的

に異なる知的能力を持っている。①絵を描いて自分の感情を表現する能力②言語を組み立てて意志を伝達する能力③現在、過去、未来と言つた時の概念④自己の認識と言つた能力の事例をあげて説明していたが、確かにアシカが口にくわえて描く絵が自己の表現とは思えないし、我が家の窓ガラスにぶつかって来る「シメ」と言う渡り鳥は窓ガラスに映る自分の姿を敵と見なして攻撃している事が理解できる。

その雑誌では人間は、その一生の内に自分の持つ脳の一万分の一しか使っていないとのことである。このような生物の持っている潜在能力は何を意味するのだろうか?適者生存、弱肉強食と言つた生存競争の中で、偶然が支配する進化で生き残つた生物が、このようなゆとりある能力を持つものだろうか?

植物がいくらでも成長できる、動物が能力を存分に発揮できる、素晴らしい環境で生物が伸び伸びと暮らす、そういった将来は来るのだろうか。(K・S)